

大学教育のディバーシティを答案事例で検討する ～全入時代のリアルとリメディアルの正義を問う～

高崎経済大学経済学部講師 鷺北貴史

はじめに

今回、第12分科会は吉野先生の問題意識を中心にコーディネートされた。居神先生が理論的な説明を行い、鷺北が現場の実態を定性的に問い、工藤先生がデータを使い定量的示すという流れがうまく噛み合った分科会になった。二月の打合せまでは、うまくいかないのではないかと危惧していたが、居神先生の「マージナル大学」の枠組みと、鷺北の「リメディアル大学」の枠組みは実はほぼ同一であり、また工藤先生の分析対象である大阪体育大で、鷺北は二月に社会学の集中講義を5日間行ってきたので、工藤先生の分析を定性的に補足できたので、この三名が登壇したことで効果的な報告ができた。質疑応答も活発に行われ、会場で問題意識の共有ができた有意義な分科会となった。私は報告をすると、ここ最近までは「大学は～あるべきだ」「リメディアル教育は大学教育とは言えない」というご批判をいただく事が多かった。しかし居神先生の指摘する2018年問題を間近に控え、潮目が変わってきた実感がある。分科会の冒頭で吉野先生が「お恥ずかしいことですが、私の大学にも低学力の学生が存在しております」と発言されたことを受け、「それは恥ずかしい事ではない。吉野先生の問題意識は正しい。むしろ学生に向き合わずに研究者である事を優先させている先生方のほうが恥ずかしい事なのだ！」と、私はひたすら吠えていた。そしてその発言が分科会参加者に受け入れていただけた事は、大学教育がまさに多様化し、同じ問題意識を持った教職員が増えてきた帰結であると考え。今回、吉野先生はじめ、児玉先生、事務局の竹之内さんのご尽力により登壇の機会をいただけた事を、この場を借りて再度御礼申し上げます。本稿は、三月六日の予稿を当日の質疑応答や登壇された先生方の報告を踏まえて加筆修正したものである。

1. 報告者の立ち位置

報告者は現在高崎経済大を中心に、様々なフィールドで様々な科目の講師をしている。具体的列挙すると以下ようになる。

- ・高崎経済大（公立大学、偏差値60弱、日本語リテラシー、論文の読み方書き方、主に成績下位の学生を集めたクラス、再履修のクラス。教員免許更新講習で教育社会学を担当）
- ・東京経済大（偏差値50程度の中堅大、基礎学力講座数的処理初級、中級を担当）
- ・湘南工科大（限りなく全入、数学科目、統計学、サブカル演習を担当）
- ・大宮開成高校（土曜予備校講座で上位クラスと下位クラスで英語を教えている）
- ・資格予備校 LEC の公務員入門講座（勉強嫌いの大学生に数的処理の基本を教えている）
- ・大学受験予備校を二校（英語、国語、生物を少人数クラスで教えている）

これに家庭教師を一本こなす日常である。（週に8ヶ所の現場を飛び回っている）

そして、二月中旬は大阪体育大で社会学の集中講義を15コマ行ってきた。

自分はいったい何の先生なんだろう？

「私は、リメディアル教育の専門家です」最近は、こう答えるようにしている。

教的処理科目が回ってくるのは、学部が理系でもと理科教師だった過去の経歴もあるのだが、前任校の LEC 大学（2013 年に廃校）で学習支援センター長として補講やら全国中継やらを担当していたことが契機となって依頼が来ている。年くってから進学した大学院では教育社会学が専門だった。（院から慶応義塾の社会研に行った）

つまり、世の大学教員の中で自分は特異な存在であると自覚している。階層別の大学で教壇に立ちつつ、高校の教壇にも立ち、資格予備校で就職指導をしつつ、大学受験予備校でも受験生指導をしている。前任校は募集停止から廃校と、ユニバーサル時代を象徴するかのような大学であった。こんな自分だから語れることがあり、また世に発信しなければならない使命があるのだ。今回の私の問題提示は、このねじれた教歴と、多種多様な現場の現職の実践から発信されているという前提を、まずご理解いただきたい。

2. 廃校となった私大に七年勤務して見えてきたもの

だらだらと十数年院生をやっていた私は、2006 年に LEC 大学に採用された。この大学は日本初の株式会社立の大学であり、今話題の L 型大学の先駆けのようなコンセプトだった。選抜もそれなりに機能していたのだが、2007 年にカリキュラム改訂が行われ、資格色が薄まった結果、中退者や入学辞退者が続出し、定員割れとなった。選抜が機能していないということは、下位層が入学してくるということであり、カオス状態が数年続いた。一部上位層は国立大に合格しながらあえて LEC 大学に進学してくる（当時の司法書士最年少合格者は LEC 大学の学生だった。社労士最年少合格者もいた。）者から、下位層は小学校の教科書も読めない層までが混在していた。（まさにマージナル常態）しかし、教授陣は真面目に講義に出てくる上位層しか目に入っていなかったのか、「うちの学生は優秀ですねー」などどメデタイことを言って現実を知ろうとはしなかった。教授会でコンテンツの重層化や学習支援の必要性を訴えても、聞く耳を持ってくれなかったのだ。しかしだんだんと優秀だった学生が卒業していき、下位学生が学園の中心となってきて、初めて現状を認識したのだ。その中で学習支援センターが設置され、私はその責任者となったのだが・・・

時すでに遅く、2010 年度からは募集停止となり、2013 年に学部は閉鎖となったのだ。同じような大学はこれからも増えていくという思いから、2007 年に日本リメディアル教育学会に入会し、毎年、教育実践の葛藤を発表しているのだが、ここで圧力がかった。

上層部から「全入という言葉は使うな」（定員割れてるのにか？）

「選抜が機能していない、もダメだ」（いや、リアルでしょ？だって）

「上位の学生は優秀であることも、きっちり発表しろ」（いや、趣旨はそれではない・・・）

様々な圧力の中で、自分が取った戦略は、[予稿は無難に書いておいて発表の場で噴火する] というものだった。今でもリメディアル教育という言葉は、市民権を得ているとは言い難いが、当時は「大学で義務教育レベルの授業をやっていることは恥だ」「恥は隠すのだ」という風潮が今よりも強かったのだ。しかし、私のやったゲリラ的教育実践発表は思わぬ波紋を呼ぶことになった。

3. 教育の「あるべきだ論」のミスマッチ

教育社会学の理論の中に、「バーンシュテインの言語コード理論」というものがある。社会階層によって使用する言語のコードが違い、学校教育は精密コードでなされているので、限定コードで育った者は学校教育に適応できなくて云々・・・という理論である。それならば教師の側が限定コードを使えばいいだけじゃん？と院生の時から感じていた疑問を教育実践に落とし込むという実践であった。この実践報告をした際に、国立大の先生から言われた言葉、「あなたは、教育の場でそんな言葉を使っているのですか？そんな言葉を使ってはいけないと教えるのが教育でしょ？間違ってます。」この実践報告は学会を二分した。主に上位校の先生からの攻撃と、全入に近い大学で格闘している先生方からの賛同という対立図式である。この「間違っている」という発言は院生の時にもよく浴びせられていた。しかし考えていただきたい。あたかも上位校のあり方こそ正義であり、それにそぐわないモノは排除するという考え方こそ、現代の大学教育を閉塞化させているのではないだろうか？自分が関わっている学生の中には、小学校から先生方に注意（叱責）をされ続け勉強に嫌気がさしてきた者も居るのだ。一旦、学生の言語コードに落とし込み、そこから再度引き上げていくという手法を「間違っている」と言い切ってしまうことの危険性を考えていただきたい。上位校の常識は、下位校の非常識ともなりうるのだ。あたかも階層の多様性を無視した常識論を振りかざす先生方はまだ多くいるのが現実だ。例えば、「リメディアル教育は単位外であるべきだ」それは、学生の水準が高い大学であればその通りだろう。しかし大半の学生が義務教育レベルのリテラシーを持ち合わせていない大学の場合、単位がからまなければ学生は勉強なんぞしないのである。

私はLEC大学時代、入学前学習の担当者だった。まともに課題を提出する入学予定者など、該当者の一割程度だった。電話攻撃やらメール攻撃やら、大学に来てもらうなど取り組んだが、それでも大半の入学予定者は課題未提出状態だった。アカデミズムの中に、リメディアルを散りばめる方法は文型科目では成立しうるのだが、数学科目の場合は四則演算できずして、大学数学など成立しないのだ。自分が今担当している数学科目の大半は義務教育からの学び直しである。それに軽く大学数学のスパイスを効かせる程度でやっている。卒業までがリメディアル、全ての科目がリメディアル。そんな大学も必要な時代なのに、それを正直にシラバスに著すとお上やマスコミが黙っていないのである。

大学教員は研究者である？ふざけるな。教員と名がつく以上、我々は教師なのだ。目の前の学生としっかり向き合わなくて何が教育なのだ。暴言を吐かせてもらえば、私は研究者になりたいとか研究したいなんぞ思ったことなど一度も無い。大学教育を改革するためには大学教員に成るしかなかった。研究業績とか求められるから、仕方ないから博士課程まで行ってやったし、論文も書いているに過ぎないのだ。(学会発表は、実態を世に問う場として積極的にやっているが) 学生が分かる、学生が満足する講義をすることこそ、下位大学の教員に求められるスキルであると考え。学生不在の、自己満足的な講義をして、学生を見下している先生方が、当時の自分の勤務先には多く存在していた。私は今勤務している全ての現場は、研究業績で呼ばれたわけでは無い。講義師として期待され、呼んでいただいているのだ。(文科省の大学設置審議会審査は合格しています、念のため)

4. なぜ教育に関して、本音を言えないのだろう

今や大学教育は、ディバーシティという名のカオス状態である。予備校現場や高校現場にいたるとはっきりと見えてくるのが、大学受験生の二極化である。より受験勉強をきっちりして一定の倍率を勝ち抜いていく層と、適当に勉強して（もしくは全く受験勉強らしきことはせずに）適当に入学できる大学に行く層である。今年度のセンター試験の結果も、何人かの予備校講師に聞いたところ、中間層が少なく、上位層と下位層にくっきりディバイド傾向になっているという。中には「受験生はディバイドを超えたセパレート状態」と指摘する予備校講師も居た。つまり一部上位層は国立早慶を狙い子どもの頃から勉強に励んでいる、この上位の大学は少子化の現代でも決して簡単になっていない。その下の層がそこそこ勉強する層と、あまり勉強せず（全く勉強はしていない層もいるが）大学に進学してくるのだと言う。

自分が指導していた学生の中には、消防士の試験に落ちたので仕方なく大学に入学した学生もいる。（全入の大学ではなく偏差値 50 程度の中堅大）在学中毎年消防士の試験を受けたが、結局合格せず、とりあえず卒業するという事例もある。LEC 大学の卒業生の中には、卒業後に専門学校に入りなおすという進路を取る学生が、一定数存在する。「就職もできない、専門学校も落ちた、仕方ないから大学に行く」このレベルの大学も存在している中で、一元的に「大学は研究の場である」というあるべきだ論を振りかざし、大学を一元化して論じるとはもはや不可能である。現在の私の現場で言うならば選抜が機能している高倍率の公立大学ですら、下位 5%を集めたクラス、再履修のクラスはやる気の無さと、出席率、課題提出率の悪さは別格である。グループ学習など完全に破綻、教務職員とタッグを組んで呼び出しの電話攻撃やメール攻撃などで、かろうじて六割方の学生を救いあげているリアルがある。彼らは、基礎学力は持ち合わせているので、まだやる気スイッチさえ入れてあげたら、再生はすんなりといくのだが。しかし、これが全入に近い大学になればなるほど、事態は深刻となる。彼らが置き忘れてきた義務教育内容の学び直し（＝リメディアル教育）を施していくことは、恥どころか正義なのだ。

それなのに、それを正直に公表した大学に対し、メディアは面白おかしく伝えるのだ。下位校の現場からの実践報告、特に下位の大学で行われている教育の実態は、なぜ隠されているのか？ひとつには、世論の反応がある。数年前にある大学のシラバスを『週刊ポスト』が取り上げ、「本当に存在したバカ田大学」という記事を掲載した。この雑誌の取り上げ方が「学生に寄り添う正義の大学」という取り上げ方をしていたなら、大学を取り巻く状況は変わっていたかもしれないのだ。もう、奇麗事は止めにしよう。もっと本音で大学教育のあり方を、実態を共有していこう。今がまさにその時であり、だから私は今回発言の場を与えられたのだ。（たぶん）

5. ではどうしたら良いのだろう？

大学入学資格試験を厳格に行い、一定以下の水準の学生が進学できないようにすれば良いのか？そうになると、私大の半数は廃校になるだろう。また、多量のニートやフリーター

が世にあふれる結果になるだろう。過去に LEC 大学の学生に高卒認定試験を解かせてみたが、英語は合格点を下回る者が続出した。基礎学力が無いために簡単な資格が取れない学生も多く存在した。私は、彼らと徹底的に向き合って基礎学力をつけさせる努力をしたが、実感として成功三割、虚しさ七割だった。しかし、この三割の再生事例を達成するだけでも全入大学の存在意義はあるのではないか？リアルは、居神先生の指摘するマージナル状態の現場が今や半数以上となっているのだ。

自分が様々な現場で教壇に立って実感することは、もはや一部の大学は「最高学府」ではなく、「最終の学び場」として存在意義を持っていると考えている。今まで全く勉強をしなかった学生に対して、義務教育レベルからの学び直しをしっかりとやる事をコンセプトとする大学である。しかし、それは恥ではない。むしろ正義なのだ。高校では、つまづいたところから学び直す「エンカレッジスクール」が、恥というより正義としてメディアは取り上げているのではないか？なぜ高校で許されることが、大学では恥となるのか？もはや大学教育もダイバーシティ（ダイバーシティー）の時代である。このことは誰もが認めているはずだ。ならば、学生の実態にあった講義を提供し、学生の基礎学力を少しでもアップさせ、そこにひとつまみのアカデミズムのスパイスを振りかけて世に送り出す事をコンセプトとする大学を、正義として認めることを提案したい。

つまりそれは、「L型大学」というよりは、まさに「マージナル大学」＝「リメディアル大学」の構想である。その中から再生し、新たな道を切り開く若者も出てくるだろう。実際に LEC 大学の学生の中には、大学在学中に勉強に目覚め、早稲田大の大学院に進学した学生も最後の卒業生の中には居たのだ。

6. 分科会を振り返って

自分は上記のような問題意識で大学の教壇に立っている。分科会当日は自分の現場の答案事例や収録した VTR を視聴していただいた。分数の出来ない大学生に徹底的に向きあっていく授業の収録は、居神先生が提唱するマージナル大学の教員のあり方を実践例として提示ができた。コーディネーターの吉野先生の問題意識を、それぞれの登壇者が独自の切り口で提示できたことで、より説得力を持った分科会が実現できたのだ。

今回も多くの批判をいただく覚悟で、全入時代の大学のリアルを吠えた。結果は賛同意見が多く寄せられ、同じ悩みを抱えている教職員が増えてきている実感が持てた。当日は「それでも研究は大切ではないのか？」という意見をいただいた。私は研究を否定しているわけでは無い。研究者である事を優先し、目の前の学生に向き合おうとしない一部の大学教員達を批判しているのだ。基礎学力支援を業者に丸投げするのではなく、大学教員も大学職員も一緒になって、目の前の学生に向き合っていく姿勢を持つ事を主張しているのだ。入学をさせた以上、教育者としてしっかりと学生を育てていくことは大学人としての義務である。どの学問分野も義務教育の基本の上に成り立っているのだから、自分の専門領域を分かりやすく基本に遡って伝えていくような努力を大学教員はしていく事が課されている時代なのだ。今後も私はこの問題意識の共有を多くの教職員の皆様としていき、大学のリアルを世に問う活動を続けていく決意を表明し、本稿を締めくくりたい。